

『萬葉一葉抄』と京都大学本『萬葉集』 ——寛元本的性格をめぐって——

池原 陽斉

はじめに

『萬葉一葉抄』（以下『一葉抄』と略記する）は、三條西実隆が文明十八年から長享三年（一四八六―八九）にかけて編纂した仮名書きの『萬葉集』類纂本で、全十巻に短歌のみ四一二六首をおさめる。排列は天象・時節・地儀……のように大別し、さらに各部を細別する仕組となっている。天象の部を例にとれば、日・月・七夕・風・雨……とこまかな分類をおこなう。『古今和歌六帖』と通じるようなこの排列が便利であつたためか、近世後期の寛政元年（一七八九）に賀茂季鷹らによって『校正一葉抄』⁽¹⁾が編まれたことから察せられるように、編纂以降、長きにわたって享受された仮名萬葉文献である。

この『一葉抄』は連歌の参考書たることを目的に編まれたと推定されている⁽²⁾が、所載萬葉歌の数が多く、『源氏物語』など古典作品の書写・伝来・注釈に多くたずさわった実隆の編んだ『萬葉集』類纂本ということもあり、本抄は作品としての価値とは別の面が注目される場合も少なくない。本抄の萬葉歌と『萬葉集』伝本の附訓はどのような関係にあるのかという問題がそれである。この点に関しては大久保正、渋谷虎雄によって先駆的な研究がなされている。⁽³⁾

さらに、二巻と三巻前半のみの五八一首分のみとはいえ、実隆自筆

本が発見されたことによって、この方面の研究はいつそう進展する。中世萬葉研究会による『三條西実隆
自筆本『一葉抄』の研究』（以下『自筆本』と略記する）⁽⁴⁾がその成果で、同書は実隆自筆本『一葉抄』の本文と『萬葉集』伝本の訓を綿密に対校し、両者の関係をつまびらかにした。『萬葉集』と対照した自筆本『一葉抄』本文の傾向は、『自筆本』の編著者のひとりである小川靖彦が以下のようにまとめている。

訓は『萬葉集』巻一―巻六が仙覚文永二年本ないし三年本に拠つたと推定され、巻七以下が仙覚寛元本と非仙覚本（特に片仮名訓本の紀州本と西本願寺本巻一二）と一致する傾向が見られる。巻七以下では仙覚文永本の訓も傍書する。⁽⁵⁾

また、自筆本『一葉抄』には相当数の傍書が存する。この傍書に関しては、巻一―六の歌が「特異な主文の訓に対して、当時の通説的な訓を主文に対し、現存しない典拠をもとに異説を記している場合もあること」、巻七以降に関しては「非仙覚本の系統とのみ一致する主文、或いは非仙覚本系統の訓と仙覚本系統の訓と一致する主文に対して、仙覚本系統の訓……を書入れたもの」が多いが、「仙覚本系統の訓と一致する主文に対して古次点を傍書したものもある」と整理がなされている。ただし、巻十二の所収歌だけは仙覚本系統の訓が丁寧に傍書されているという。⁽⁶⁾

悉皆調査にもとづく右の見解は基本的に追認されてよいであろう。この調査結果を土台に、本稿ではいくばくかの考証をこころみたい。

一 京都大学本代赅書入の研究史

前節で述べたとおり、『自筆本』の調査結果は大略追認すべきと考える。しかし、『萬葉集』伝本研究の進展にもなつて、わずかではあるが見直すべき点もあるようにおもふ。それは京都大学本（曼殊院本）との関係についてである。

京都大学本は近世初期に書写された仙覚文永本の一本で、応長元年（一二三二）年十月二十五日付の寂印、文和二年（一二三三）年八月二十五日付の成俊の書写奥書を有する、いわゆる寂印成俊本系統に属する伝本のひとつである。この系統はさらに細分化されるが、そのうち京都大学本は巻末に禁裏御本（散佚）と校合した中院本（散佚）の奥書も持つことから、直接には中院本を転写した本とおぼしい。^{〔7〕}この本に代赅色による書入（代赅書入）が存し、その位置づけが『萬葉集』の伝来史・訓読史研究において問題となっている。

『自筆本』では、実隆自筆本の本文・傍書を『萬葉集』伝本の附訓によつて分類する際、この京大本代赅書入を「範圍外」に置くと宣言する。京大本巻一の仙覚寛元本奥書を根拠に従来寛元本との関連が想定されていた代赅書入の訓（『校本萬葉集』首巻^{〔8〕}）が、非仙覚本系統に属するのではないかと、山崎福之が一連の研究^{〔9〕}で指摘したことがその理由である。京大本代赅書入の位置づけが明確でなくなつたため、慎重を期し埒外としたのであろう。

だが、『萬葉集』次点本の伝本系統が平仮名訓本・片仮名訓本に大

別できることを明示した田中大士の一連の研究^{〔10〕}によつて、往事の研究動向には再考の余地が生まれてきている。やや迂遠とはなるが、研究史を整理しておきたい。

田中が指摘するように、次点本のうち平仮名で訓を書く本（桂本、元暦校本、類聚古集など）と、片仮名で訓を書く本（元暦校本代赅書入、廣瀬本、紀州本〔巻十まで〕など）では、長歌の附訓の分布が異なる。平仮名本は極端に長歌訓が少なく、片仮名本となると一定数の附訓がなされている。両者はやや系統を異にする伝本と見做せる。^{〔11〕}

そして、代赅書入の位置づけを考えるにあつて問題となる寛元本との関係で注目すべきは、片仮名本の長歌訓の分布である。仙覚は『萬葉集』を校訂するにあつて、所持する伝本に訓がない場合には朱で新たに訓を附けた（新点）わけだが、長歌の附訓状況を聞すると、仙覚本が朱で訓を書いた箇所と、片仮名本が無訓とする箇所がほぼ一致するのである。^{〔12〕}

この片仮名本と京大本代赅書入の訓は類似する場合が多く、その一方で寛元本系系統の伝本である神宮文庫本とはそれほど一致しない。そのため山崎は、代赅書入が次点本を揺曳するものと見做したわけである。

しかし田中は、寛元本が本来は本文の左右に訓を併記する形式（本文の右に底本とした次点本片仮名訓、左に異本の訓・仙覚自身の改訓^{〔13〕}）を持つはずなのに、神宮文庫本は訓を一種とする場合が多いことを指摘する。同本を「仙覚の寛元本の純粋ならざる一伝本」とする上田英夫の理解^{〔14〕}もふまえ、代赅書入と神宮文庫本の訓に不一致の例が見えることは、代赅書入が非寛元本系統であることを意味しないと述べる。京大本巻一奥書の記載を疑つてまで、代赅書入を次点本か

らの抄出と見做す必然はないという田中の指摘は正鵠を得ていよう。

また、田中は代赭書入と次点本片仮名訓が類似する理由を以下のよう

に説明する。

京赭は、仙覚文永本に書き入れられた形態である。書き入れは一般の性格からして、本体と重なる要素は基本的に書き入れられない。文永本には仙覚の訂正訓は存するので、その部分は書き入れられなかったと考えられる。京赭は、寛元本の中でも、主として歌本文の右側の底本の訓が反映していることになる。¹⁵⁾

京大本自体は文永本系の一伝本である。すると、本文がそもそも仙覚訓であるのだから、次点本片仮名訓と仙覚改訓を併記する寛元本によつて書入をおこなう場合、寛元本から摘出する必要があるのは、本文右に附された底本の訓（次点本片仮名訓）ということになるはずである。代赭書入が次点本片仮名訓と類似するのは結果的なものとみる田中の理解は、妥当といつてよいであろう。

とすれば、『一葉抄』の本文を『萬葉集』の附訓と対照するにあつて、京大本代赭書入の存在を「範囲外」に置く必要はあるまい。寛元本の一本と把握し、再検証する必要があるのではないだろうか。そこで次節以降では両者の関係を具体例に即して検証してみたい。

二 検証の方法と目的

『一葉抄』と京大本代赭書入を通じて寛元本との関係を検証していくわけだが、まゝ三種以上の訓が附される場合もあり、ときに本文訓の抹消すらなされるなど、複雑な様相を呈する代赭書入の掲出に際しては、以下のような処理をおこなった。

A、京大本の本文訓と代赭書入は、「本文訓（代赭書入）」という形式で掲出した。

B、代赭書入が複数ある場合は「本文訓（代赭書入①・代赭書入②……）」のように、中黒を挟んで書入を列記した。

C、赭で本文訓が抹消されている場合は「本文訓（代赭書入）」のように、本文訓に取り消し線を附した。

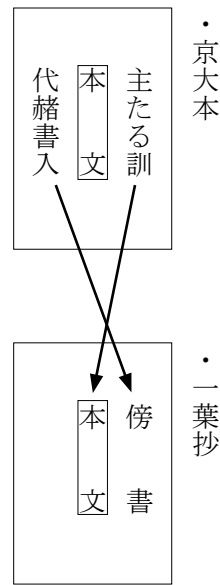
D、『一葉抄』の本文・傍書と京大本の本文訓・代赭書入が一致する場合には、「本文訓（代赭書入）」のように、本文訓・代赭書入を太字とした。

つぎに検討対象について。紙幅の都合もあるので範囲を限定しておきたい。『自筆本』とおなじく実隆自筆本『一葉抄』を対象とするが、五八一首もの歌数を、具体例をしめしつつ一挙に論じることが困難である。そこで本稿では、実隆自筆本『一葉抄』所収歌のうち傍書を持つ例に範囲を限定して考証する。傍書を持つうたに区切るメリットは、歌数を制限できることもさることながら、『一葉抄』と、京大本代赭書入を通じて寛元本との関係を検証する」という目的に照らしても有効な手法と判断しうるからである。

既述のとおり、寛元本は主たる訓を本文右に、異訓・改訓（仙覚訓）を左に附す本である。実隆が寛元本を参照したと考えた場合、この二種の訓をどうあつかうのか、ということが問題となる。もちろん、いずれかの訓を無視する可能性も考えられる。研究史においても、巻六以降には寛元本からの影響が看取されている¹⁶⁾が、『一葉抄』に傍書が満遍なく附されているわけではないことから、実際に取捨選択する場合は多かったと推察できる。

しかし、ときには『一葉抄』が二種の訓をともに採用し、それが本

文と傍書という形に反映されている可能性も、想定されてよいようにおもふ。そのように考える場合、京大本の形態は注目すべきものといつてよい。京大本は結果的にはあるが、仙覚訓を主たる訓として本文の右に書き、次点本片仮名訓を左（必ずしもではないが、基本的に）に附す。この形態は、ちょうど寛元本と表裏の関係にある。すると、『一葉抄』が寛元本をそのまま享受した場合があるとすれば、両者は以下のように対応するはずである。



もしもこのような例が多くを占めるとすれば、寛元本と『一葉抄』との関係は非常に密接なものと見做せるのではないだろうか。個々の訓と本文の関係ではなく、本文訓と代赭訓、本文と傍書の二種ずつの関係から、その可能性を探ってみよう。

三 『一葉抄』本文と代赭書入が対応する例①

実際に例歌をあげていこう。まずは、右の図式に該当するうたをとりあげてみたい。京大本代赭書入が本文、京大本主訓が傍書として『一葉抄』に取られている例としては、以下のようなものがある。萬葉歌・一葉抄歌の順に掲出し、解説を附す。『萬葉集』は巻数とうた番号を、『一葉抄』は番号のみを提示した。

①玉梓能 妹者珠氈 足氷木乃 清山邊 蒔散漆（萬七・一四一五）

玉ほこのいもはたまかも あしひきのきよき山邊にまけはちりぬる（一・四八五）

傍書を有する問題の初句を、京大本は「タマツサ（ホコ）ノ」にする。代赭訓が『一葉抄』の本文、本文訓が傍書と一致しており、まきに見取り図どおりの例といつていい。ほかにも類例は少なくない。類例を列記し、全体をとおしての説明をほどこす。

②春雨尔 衣甚 将通哉 七日四零者 七日不来哉（萬十・一九一七）

春雨のころはきみもしれるらん なぬかしふらはなゝ夜こしとや（一・三〇〇）

③御食向 南淵山之 巖者 落波太列可 削遺有（萬九・一七〇九）

みけむかふなむふち山のいはほには ちるなみたれかけつりのこせる（一・四九二）

④國遠見 念勿和備曾 風之共 雲之行如 言者将通（萬十二・三一七八）

國遠みおもひなわひそ かせのとも雲の行ことわれはかよはむ（一・一〇〇）

⑤殺目山 往反道之 朝霞 髣髴谷八 妹尔不相牟（萬十二・三〇三七）

殺目山ゆきかふ道の あさかすみほのかにたにやいもにあはさらん（一・一五四）

⑥不欲恵八師 不戀登為杼 木綿間山 越去之公之 所念良國（萬十二・三二九一）

をしへやし恋しとすれと ゆふま山こえにしきみかおもほゆらくに（一・五〇七）

⑦昔者之 事波不知乎 我見而毛 久成奴 天之香具山（萬七・一〇九六）

いにしへのことはしらぬを われ見てもひさしくなりぬあまのかこやま（一・四六八）

⑧隠口乃 泊瀬山尔 霞立 棚引雲者 妹尔鴨在武（萬七・一四〇七）

かくらくの初瀬の山に霞たち たなひく雲はいもにかもあらん（一・八三三）

⑨外耳 君乎相見而 木綿牒 手向乃山乎 明日香越将去（萬十二・三二五二）

よそにのみ君をあひみて ゆふたすき手向の山をあすかこえなん（一・五一二）

⑩相見而 幾久毛 不有尔 如年月 所思可聞（萬十一・二五八三）
あひみてはいくひさゝさもあらなくに とし月のことおもほゆるかも（一・三四四）

京大本は、②「コロモハイタクトホラメヤ（コロモハキミモシレルラム）」、③「ミナ（ナム）フチャマノ」、④「カセノムタ（トモ）」、⑤「キリメ（イタメ）ヤマ」、⑥初句「ヨシ（ラシ）エヤシ」（「エ」と「へ」の仮名違いあり）／三句「ユウ小（マ）ヤマ」、⑦「アミノカク（コ）ヤマ」、⑧「カモリ（カクラ）クノ」、⑨「ユフタ、ミ（タスキ）」、⑩「イクヒサシサモ（ヒサ、ニモ）」と、いずれも京大本代赅書入の訓が『一葉抄』本文と、本文訓が傍書と対応する。

なお、⑩は寛元本系の神宮文庫本・細井本が「イクヒサ、ニモ」と訓み、その右に「ヒサシサモ」と傍記する。嘉暦伝承本が「いくひさゝにも」とするので、こちらを主たる訓（本文右の附された寛元本底本

の訓）とする二本が寛元本本来の形と判断してよいだろう。

また、⑧は神宮文庫本・細井本も本文右に「コモリクノ」、左に「カクラ」の訓を持ち、京大本と一致する。京大本代赅書入は次点本片仮名訓を継承するはずで、二本の附訓位置はいぶかしい。いずれかにミスがあるのだろうが、次点本をみると「かくれぬの」（類聚古集）、「カクレクノ」（廣瀬本）などとともに「かくらくの」（類聚古集墨訓・紀州本）も存する。逆に「コモリ」は西本願寺本以下の文永本が青で書く新点であるので、神宮文庫本・細井本が附訓位置を誤った（あるいは意図的に改変した）と推定できる。寛元本の附訓位置は本来逆であったのだろう。

⑧・⑩のいずれも『一葉抄』は寛元本にならったかのような形式であると判断できる。¹⁷⁾

四 『一葉抄』本文と代赅書入が対応する例②——小異のある場合

次に①～⑩までと同様の対応関係を持つものの、仮名遣いなどに小異があり、完全には一致しない例をとりあげる。

⑪玉勝間 安倍嶋山之 暮露尔 旅宿得為也 長此夜乎（萬十二・三一五二）

玉かつまあへしま山を 夕露に旅ねしかねつな^{ハエスヤ}かき此夜を（一・二〇三）

⑫大穴道 少御神 作 妹勢能山 見吉（萬七・二二四七）

おほなむちちひさ^{サクナミ}きかみのつくりたる いもせの山をみるはしよしも（一・四八二）

⑬留西 人乎念尔 蛭野 居白雲 止時無（十二・三二七九）

とまりにし人をおもふに カキツノニイ かけろふのゐる白雲のやむときもなし (一・二〇一)

⑭香山 雲位桁曳 於保々思久 相見子等乎 後戀牟鴨(萬十一・二四四九)

かに山に雲ゐたなひき おほしくあひみしこらをのちこいむかも (一・八七)

⑮タ々 吾立待尔 若雲 君不来益者 應辛苦(萬十一・二九二九)
よひくゝにわかたちまつに ソコハクモイ もしく□や君きまさぬはくるしかるへし (一・三九六)

⑯驗無 戀毛為鹿 暮去者 人之手枕而 將寐兒故(萬十一・二五九九)

しるしなき恋をもするか タされは人の手枕まかむこゆへに (一・三七九)

⑰秋芽子之 枝毛十尾丹 露霜置 寒毛時者 成尔家類可聞(萬十・二一七〇)

秋萩の枝もとをゝに露霜をきて さむけき時になりけるかも (一・二〇七)

⑱は京大本が「タヒネハエスヤ(タヒネシカネツ)」、『一葉抄』傍書が「たひねハエスヤ」とする。いわゆる歴史的仮名遣いとして正確なのは京大本であるが、平安時代末期以降「え」と「ゑ」の区別は明確でなくなる。¹⁸⁾『萬葉集』の伝本にも同種の例は多い。実隆のみた『萬葉集』に「エ」とあったか、それとも実隆が誤ったか。いずれにせよさしたる相違ではない。

⑲は「スクナミカミノ(チイサキカミノ)」で、『一葉抄』本文「ちひさき」とは小異するが、この混用も前田家本『色葉字類抄』にみえ

るもので、鎌倉時代初期には一般化していたとおぼしいから、問題とするにあたらない。

⑳の『一葉抄』三句の傍書「カキツノニイ」は、このままでは語として認定しがたい。『自筆本』はママを附さないが、京大本が「アキツノニ(カケロフノ)」とするように、「あ(安)」と「か(可)」の誤写を想定してよいだろう。

㉑の『一葉抄』初句「かに山」は不審な地名である。『萬葉集』はもちろん、「和歌&俳諧ライブラリー」(日本文学 Web 図書館)によって検索範囲をひろげても例をみない。『自筆本』もママを附すとおり誤写とみてよく、「かこ山」が本来の形であろう。香具山をカコヤマと訓む例は次点本に多く、当該歌の場合でも類聚古集や細井本が該当する。「こ(古)」と「に(尔)」の字体が近似するため、誤った蓋然性がたかい。すると、京大本「カク(カコ)ヤマニ」と対応する。

㉒の場合は、肝心の四句に判読不能箇所があり、『自筆本』は「(もカ)」とする。元暦校本以下の次点本が「もしろもや」と訓むので、妥当な判断であろう。この本文ならば京大本が「ソコハクモ(モシクモヤ)」に作っており、『一葉抄』と一致する。

㉓は「ヒトノテマキテ(タマクラマカム)ネナムコユヘニ」とある。傍書を生かして『一葉抄』の下二句をしめせば、「人のてまきしてねなむこゆへに」となり、四句が単独母音をふくまない字余りとなってしまう。『自筆本』も注記するように、「人のてまき」の「き」は「し」を書いた後に重ね書きしているから、書写に際して混乱があったものとおぼしい。「し」を衍字とみてよければ、これも図式どおりの例といえる。

㉔は代赭書入が複数存在する点が特殊である。さきに三種の訓をし

めしておく。

京大本主訓「ツユシモヲキサムケモトキハ」／代赭書入1「つゆ）シモヲキテ^{江本}サムケキトキニ」／代赭書入2「ツユシモヲキサムケモトキハ」

訓の数こそ多いが、様相自体はさほど複雑でもない。『一葉抄』の傍書は京大本主訓・代赭書入2とひとしく、これは文永本訓と一致する。一方、本文の三・四句は代赭書入1と同様であり、次点本片仮名訓の紀州本と共通する文字列となっている。主訓と代赭書入2は同文であるから、どうして書入2が書き込まれたのかは不思議であるが、寛元本と『一葉抄』とのつながりについては如上の例と異ならない。対応関係をみとめてよいであろう。

⑮はやや問題をのこす²⁰かとおもうが、この⑪～⑰の『一葉抄』の例も、おおむね①～⑱までと同様に寛元本にちかしい形態であると判断して差しつかえないであろう。

五 『一葉抄』本文と京大本本文が対応する例

ここまであげてきた①～⑰のような例ばかりであれば、寛元本と『一葉抄』が接近していることを首肯するのは容易となる。しかし実際には、図式どおりに適合しない場合も少なくない。稿者の想定に有利な例だけを挙げるのでは片手落ちとなるので、以下では図式にあてはまらないものを確認していく。

⑱霞發 春永日 戀暮 夜深去 妹相鴨（萬十・一八九四）

かすみつつ春のなか日をこひくらし よのふけゆけ^きはいもにあへるかも（一・一四七）

⑲和射美能 嶺往過而 零雪乃 猷毛無跡 白其兒尔（萬十・二三四八）

わさみのゝ嶺雪す□てふる雪の うと^{いと}みもなしとまたせそのこに（一・二八〇）

⑳夕凝 霜置来 朝戸出尔 甚踐而 人尔所知名（萬十・二六九二）

夕こりの霜おきにけり あさ戸いてにあとふみ分て人にしらす⁺な（一・二二〇）

京大本にはそれぞれ、⑱「ヨノフケユケハ（ユキテ）」、⑲「ウトミ（イトヒ）モナシト」、⑳「ヒトニシラルナ（シラスナ）」とある。①～⑰までとは逆に、いずれも京大本の主たる訓と『一葉抄』本文、代赭書入と傍書が一致する例である。

ただし、この三例の場合には注意すべき点がある。それは次点本訓との関係で、⑱の場合、類聚古集こそ「よふかくゆきて」という独自の訓を持つが、廣瀬本・紀州本は「ヨノフケユケハ」とあり、京大本の主訓と同様なのである。「フケユケハ」は次点本から寛元本・文永本まで継承された訓ということになる。すると、寛元本の左側に附された訓は底本のものではなく、なんらかの異本の訓と見做せる。代赭書入はこの異訓を取り込んだのであろう。

また、⑲の「うとみ」は元暦校本・類聚古集のほか片仮名本である紀州本の採用する訓で、㉔も嘉暦伝承本・廣瀬本が「しらるな」とする。京大本の主訓といずれも合致しており、これも寛元本右訓と文永本訓が同様であったため、代赭書入が寛元本の左に附された異本の訓を取ったと考えれば、京大本は結果的に寛元本と同様の形態になったと判断できる。『一葉抄』との対応が①～⑰までと逆になっているのも、

このような採取事情にもとづくのではないか。

なお②⑩に関しては、神宮文庫本と細井本も右訓「シラルナ」、左訓「シラスナ」とする。もちろん⑧で述べたとおり、また⑬・⑭にも複数の訓がないことから推察できるように、この二本の附訓は寛元本本来の形態をつたえない場合も多く、十分に信を置くことは難しい。それでも参照資料としての価値は主張できるものとおもう。寛元本の形態は「シラルナ（シラスナ）」であつたのだろう。この⑬・⑭も、①・⑦に準じる例と考えてよさそうである。

六 『一葉抄』と京大本の関係が不完全な例①

以上の挙例は、おそらく寛元本との関係を強く主張しうるであろう。しかし、京大本と『一葉抄』を対照していくと、割り切ることが困難におもえる場合も少なくない。煩雑とはなるが、以下では数首ずつ似通った問題を抱えるうたを取り上げ、指摘しうることから述べていく。まずは代赭書入を完全には反映していない場合を検討する。

②⑪秋之雨ル 所沾乍居者 雖賤 吾妹之屋戸志 所念香聞（萬八・一五七三）

秋の雨にぬれつゝをれば やしけれとわかいもかやしおもほゆるかも（一・一五）

三句は京大本も「ヤシケレト（サヒタレト）」とする。類聚古集・廣瀬本・紀州本も京大本主訓とおなじく「やしけれ」とする例なので、⑬・⑭に相当する。問題は四句で、京大本は「ウキモカ（ウキイモカ・ウキモコ・ウキモカ）ヤトシ」と複数の代赭書入を持つが、『一葉抄』には反映されていない。ただし、『一葉抄』の「わかいもかやし」

は『萬葉集』本文の「戸」に相当する本文を缺く。歌意も通じず、書写時に問題のあつた可能性が想定できる。

②⑫夜干玉乃 今夜之雪ル 率所沾名 将開朝ル 消者惜家牟（萬八・一六四六）

うはたまのこよひの雪にいさぬれんな あけんあしたにけなはおしけん（一・二四〇）

京大本は「ヌ（ウ）ハタマノ」とし、『一葉抄』と対応する。ただし京大本は三句にも「イサヌレナ（ヌレム）」と代赭書入があるが、②とおなじく反映していない。指摘できるとすれば、『一葉抄』の三句「いさぬれんな」が、『萬葉集』伝本に例をみない独自訓という点であろう。『自筆本』も「実隆が独自の判断で訓を改めたと思われる箇所がある」、「実隆自身の見識によると見られる訓もある」と指摘しており、実隆はときに自身の判断で改訓をおこなう。すると、ここは自説に寄つたため、『萬葉集』の異訓を取る必要をみとめなかったと考えることはできよう。

②⑬高山ル 高部左渡 高々ル 余待公平 待将出可聞（萬十一・二八〇四）

たか山にたかへさわたりたかくに わかまつきみをまちいてんかも（一・四九八）

初句は京大本の「カケ（タカ）ヤマニ」と一致するが、二句「タカヘサワタリ（ワタル）」の代赭書入は反映されていない。②⑬・②⑭のような本文上の問題も見出せず、『萬葉集』伝本との関係から解決策を提出することは困難だとおもう。この②⑬に関しては、ときに「実隆が独自の判断で訓を改め」という点を念頭において、寛元本の左右の訓を取捨選択する場合があつたと考えるほかあるまい。あるいは②⑭も

同様かもしれない。

もちろん、「そもそも寛元本に依拠していないから、代赭書入に対応する本文(傍書)がない」と考えることも論理的には可能であるが、悉皆調査をおこなった『自筆本』も『一葉抄』の有力な材料が寛元本であること自体は是認しているし、①～②④までの結果をかんがみても、同抄が寛元本と無縁に編まれたとは考えにくい。そして、『一葉抄』の傍書を持つうたと、代赭書入のあるうたが総じて一致するわけではない以上、実隆は意識的に伝本の訓を取捨選択していたと推定することとは、決して恣意的な判断とはいえないであろう。

代赭書入を完全に反映しない例には、以下のようなものもある。

②4 木道尔社 妹山在云 櫛上 二上山母 妹許皆有来(萬七・一〇九八)

さちにこそいも山ありといへ くしかみのふたかみ山もいもこ

そありけれ(一・四七〇)

京大本は「カツラキ(クシカミノ・ミクシケノ)ノ」に作り、傍書「ミクシケノ」と代赭書入「クシカミノ」を持つ。『一葉抄』はそのうち、代赭訓「クシカミノ」を本文とする。

この②4で注目すべき点はふたつある。ひとつは神宮文庫本・細井本の二本が「カツラキ(クシカミノ)ノ」としており、『一葉抄』の採用する訓と一致すること。もうひとつは元暦校本以下の次点本が片仮名本もふくめ、総じて「くしかみの」とすることである。この附訓の分布によれば、寛元本の本来の形は「カツラキ(クシカミノ)ノ」であり、『一葉抄』はそれに寄ったと見做せるようにおもう。もちろん、②4以下のように入捨選択された結果という可能性もあるが、「ミクシケノ」は、実隆が目にするここのなかったとも考えられ、断案をくだすことはむ

ずかしい。

②5 神左振 磐根己凝敷 三芳野之 水分山乎 見者悲毛(萬七・一一三〇)

神さふるいはねこゝしきみよしのゝ みつわけ山を見ればかな
しも(一・四七二)

京大本の二句は「イハネココシキ(コリシキ・ココシク)」とする。対照すべき伝本の訓は複雑な様相を呈しているので、整理も兼ねて総覧しておきたい。

元暦校本「こりしく」(代赭「こきしき」)／類聚古集「にきしき」(墨で「に」を消し「こ」)／古葉略類聚抄「こきしき」／紀州本「こきシク」／廣瀬本「コ、シク」／神宮文庫本・細井本「ココシキ」(本文左に「リシク」)／西本願寺本「ココシキ」(本文左に「リ古」)

元暦校本の「こりしく」など京大本代赭書入にはみえない訓も多いが、元暦校本代赭書入・類聚古集・廣瀬本傍書・西本願寺本古訓と、多数の次点本が「コリシキ」とする。しかし、一本とはいえ片仮名訓本の廣瀬本には「ココシク」とある。片仮名訓が二種はあったということだが、神宮文庫本・細井本の左訓は元暦校本に近く、寛元本の本来の形は「ココシキ(コリシキ)」と考える方が穏当であろう。

すると、②4でしめした推論とは抵触するわけだが、当該歌にも注意すべき点がある。四句は京大本代赭書入を缺くが、神宮文庫本・細井本は「ミツワケ(ミコマリ)ヤマヲ」とするので、本来は左右に訓を持つ句であつたらしい。この左訓「ミコマリ」は『一葉抄』の傍書「みくまり」と小異するが、おおむね一致する。小異の原因が誤写か改変かは判然とせず、いくらか本文に問題をのこす例である。明解は得が

たいが指摘しておく。

七 『一葉抄』と京大本の関係が不完全な例②

一筋縄ではいかない例はほかにもみられる。なお数首を検証する。

②⑥思贍 痛文為便無 玉手次 雲飛山仁 吾印結 (萬七・二三三五)

おもひあまりいともすへなみ 玉たすき雲とふ山にわれしめむ
うねひの

すひ (一・四八九)

四句は京大本が「ウネヒノ(クモトフ)ヤマニ」に作っており、完全に対応する。一方の結句には代赭書入がない。しかし神宮文庫本と細井本をみると、いずれも「ワカシメムスフ」としており、『一葉抄』の傍書と対応する形となっている。二本とも訓は一種しか附されておらず、本来の寛元本の形を明らかにすることはできないが、文永本の京大本が「ワレ」とし、寛元本系の二本が「ワカ」とするということは、寛元本段階ではこの二訓が併記されていた可能性を想定できよう。

②⑦春霞 井上従直尔 道者雖有 君尔将相登 他廻来毛 (萬七・

一二五六)

春霞井のうへにたえに道はあれと 君にあわんとほかめくりく
井かみに すくに たも口ほり

もくも (一・一二三〇)

結句は『一葉抄』の傍書に缺字こそあるものの、「タモトホリ(ホカメクリ)クモ」と一致すると断じてよいであろう。なお、神宮文庫本と細井本をみると、「ホカメクリ(タモトホリ)クモ」と本文訓と書入の位置は京大本と逆になっている。文永本系の伝本が「タモトホリ」を青書することを考慮すれば、代赭書入は寛元本右訓を反映すると見做せよう。

二句には代赭書入がない。『一葉抄』傍書の「井かみにすくに」は元暦校本や類聚古集の平仮名訓とは相違し、元暦校本代赭書入・廣瀬本・古葉略類聚抄の左訓といった片仮名訓と一致する。寛元本は次点本片仮名訓を採用するから、後者と対応するのは順当である。また本文の「井のうへにたえに」は文永本訓「キノウヘニタ、ニ」とほぼ一致する。「え」と踊り字の誤写は想定しやすいから、同形とみとめてよからう。

ここも神宮文庫本と細井本に注視すべき点がある。二本は二句を「キノウヘ(カミ)タ、ニ」としており、左訓「カミ」は次点本片仮名訓と一致する。一方で、当該句後半の片仮名訓(スクニ)は缺くから、この二本は寛元本の姿を半端につたえているのだらう。京大本とその代赭書入からは推察しえないが、『一葉抄』が寛元本本来の形を継承したとみることは可能である。つぎの②⑧も類例とおぼしい。

②⑧天雲 依相遠 雖不相 異手枕 吾纏哉 (萬十一・二四五二)

あま雲のよりあひ遠みあはすとも こと手枕をわれはまかめや
たへまを あたしたまくら

(一・八八)

四句は「アタシタマクラ(コトタマクラ)」とあって京大本と対応し、二句の傍書「たへまを」は嘉暦伝承本と廣瀬本に存する訓(「耐えまを」と仮名は異なる)である。片仮名本の廣瀬本訓ということは寛元本右訓にひとしい精算が高く、現存する寛元本系伝本の不備を指摘しうる可能性がある。

②⑨吾妹子之 赤裳裙之 将染渥 今日之躬深尔 吾共所沾名(萬七・

一〇九〇)

わきもこかあかものこしをそめひてん けふのこさめにわれと
ぬれぬな ぬらすな (一・一〇〇)

京大本をみると、二句は「アカモノネソノ（コシヲ・スソノ）」、結句は「ワレハネレネオ（ヌレスナ・ヌラスナ）」とおおむね対応するが、三句は「ソメヒチム（ヌレヌレト）」とあつて、本文・傍書のいずれとも相違する。細井本が「ソメヒチム（ソメントテ）」に作り、左訓「ソメントテ」は次点本と共通する。寛元本に存した訓と見做せるが、傍書の「そめひてん」は『萬葉集』の訓にみえないもので、特定はできそうもない。実隆の案と考えるしかないだろうか。

③〇狂語香 逆言哉 隠口乃 泊瀬山^ル 廬^ニ為云（萬七・二四〇八）
まかことかさかさまことか かくらくのはつ瀬の山にいほりす
といふ（一・四八四）

この③〇も同趣の例で、三句「カモリクノ（カクラクノ）」は京大本と一致、結句の傍書「ふせり」は『萬葉集』の附訓に類をみない（本文「いほり」は『萬葉集』の訓総体とひとしい）。現存伝本との対照から考えるかぎり、やはり実隆の独自本文と見做すべきだろうか。ここまで、いくつかのパターンに照らして『一葉抄』の本文と想定しうる寛元本との関係を検証してきた。最後に類例から漏れる、やや個別性のつよい例を提示する。

③①足引之 山行暮 宿借者 妹立待而 宿将借鴨（萬七・二二四二）
あしひきの山ゆきくれて やとからはいもたちまちてやとかさ
んかも（一・四七九）

『一葉抄』が傍書を持つ二句は京大本も「ヤマユキクサシ（クレテ）」とする。問題は結句で、京大本をみると代赭書入はないが、「ヤトカラムカモ」と訓じている。この訓は『一葉抄』の「やとかさんかも」と相違する。ただ、京大本以外の文永本の訓が総じて『一葉抄』と一致することを考慮すれば、ここはむしろ京大本の訓を誤写の産物と考

えるべきではないだろうか。②そう考えると問題は解消できる。

③②風交 雪者零乍 然為蟹 霞田菜引 春去尔来（萬十・一八三六）
風ませに雪はふりつゝ しかすかに霞たなひく春はきにけり
（一・一四三）

京大本は初句「かせましり」とある。これは文永本訓であるが、『一葉抄』と一致するのは頭書の「交」である。この頭書は次点本片仮名訓（廣瀬本・紀州本）を継承するから、寛元本も本文右にこの訓を有していたとおぼしい。頭書とされた理由はおぼつかないが、代赭書入であるという点を重視するならば、大きな問題はない。

ついで下二句をみると「カスミタナヒキハルサリニケリ（ヒキハルハキニケリ）」とあり、おおむね『一葉抄』と重なる。問題は四句末で、「霞たなひく」（『一葉抄』）、「カスミタナヒキ」（代赭書入）と小異がある。四句末を終止形「く」とするのは平仮名本訓（元暦校本・類聚古集）であるから、この点を重視すると寛元本の枠から飛び出すこととなる。わずかな相違ではあるが、寛元本的性格をみとめうるかどうか、やや存疑の例といってよい。この程度の改変ならば、実隆の手に寄る可能性を想定してよいようにもおもすが、これ以上は追究するための手管を缺く。疑義を呈すにとどめたい。

おわりに

ここまで、自筆本『一葉抄』所収歌のうち傍書を持つ例について、『萬葉集』の京都大学本とその代赭書入との対校を中心に検証をかさねてきた。その結果、①～②④までのような、寛元本をそのまま移してきたとおぼしいような例が少なくないことを確認できた。また②以降

に關しても、②などのように寛元本と対応しない本文を持つ例も存するといえ、大多数のケースは神宮文庫本や細井本などの寛元本系の伝本や、次点本片仮名訓と照応することによって、つながりを看取できる場合が多いことも指摘しえた。

もちろん④以降のケースについては、次点本片仮名訓を援用し、現存する寛元本系の伝本にみえない訓を想定するという手法は妥当なのかという問題はあろう。本稿では、『萬葉集』は伝本間の異同の比較の少ない古典作品であり、とくに片仮名訓本同士はちかい関係にあるため、廣瀬本・紀州本などの片仮名訓を寛元本右訓に代替することは、ある程度は可能であろうという立場で検証を重ねてきた。妥当性をみとめるかどうか、なお検討の余地があるようにおもう。実隆の取捨選択という謂いについても同様である。

また、『一葉抄』の傍書の表記にも問題をのこす。平仮名書き・片仮名書きの両様があり、片仮名書きの場合にはとくに他本注記「イ」を持つ例もあり、これらもふくめて、寛元本との関係のみで『一葉抄』の成立を考えてよいかどうか、こちらも重要な課題といえよう。問題は山積しているが、京都大学本を祖上に載せることによって、『一葉抄』の本文に關して、従来と異なる視点をしめすという最低限の目的は果たすことができたようにおもう。

最後に、本稿の検証と直接に關係はしないが、寛元本の復元に關してふれておきたい。現存する寛元本系統の伝本には神宮文庫本と細井本があるわけだが、神宮文庫本が「純粋ならざる一伝本」であることは既述のとおりである。^③細井本も類似した本文を持ち、しかも冷泉家本（次点本）の伝本（巻四・巻六。巻四後半の卷三重出箇所をふくむ）との混成本である以上、神宮文庫本よりも寛元本としての本文的

価値は低いと判断してよからう。^④京都大学本代赅書入は上記二本よりも多くの訓をつたえるが、書入であるという形態面の缺陷がある。『萬葉集』の伝本自体に以上のような缺陷があることをおもえば、寛元本の復元にあたっては別ルートからの検証も視野に入れておくべきであろう。本稿でとりあげた『一葉抄』のような仮名萬葉文献は、その一端となる可能性を持つ。仮名文献に引用された萬葉歌をとおして『萬葉集』享受の足跡をたどる。むしろそれも重要な研究課題であるのだが、それだけではなく、『萬葉集』の伝本・伝来、あるいは訓読・読解の研究にかかわっても、仮名文献の検証は少なからぬ意義を有するはずである。^⑤この点を申し述べて本稿を終える。大方のご批正を仰ぎたい。

「注」

- (1) 『校正一葉抄』については、岩下武彦ほか「翻刻」『校正一葉抄』『紀要（中央大学文学科）』第八十七号・二〇〇一による。
- (2) 深沢眞二「連歌の万葉像」『国文学 解釈と鑑賞』第六十二巻第八号・一九九七
- (3) 大久保正「三條西実隆の萬葉研究——一葉抄について」『萬葉の伝統』塙書房・一九五七、初出一九五四、渋谷虎雄『所収萬葉和歌集成 室町後期』（桜楓社・一九八五）
- (4) 中世萬葉研究会『自筆本『一葉抄』の研究』（笠間書院・一九九七）
- (5) 小川靖彦「一葉抄」『和歌文学大辞典』日本文学研究所（図書館）
- (6) 岩下武彦・江富範子・小川「自筆本『一葉抄』の訓について——萬葉集古訓との対照」（前掲④所収）

(7) 寂印成俊本の系統に関しては、大石真由香「本書のまとめと研究の展望」(『近代初期『万葉集』の研究 北村季吟と藤原惺窩の受容と継承』和泉書院・二〇一七、初出二〇一六)に最新の知見がしめられている。

(8) 『校本萬葉集』首巻は、正確には寛元本と文永本を校合した禁裏御本の訓を代赅で書き入れたと述べている。

(9) 山崎福之「類聚古集の片仮名訓書入」(『萬葉』第一一三号・一九八三)、同「俊成本萬葉集」試論——俊成自筆『古来風躰抄』の萬葉歌の位置」(『美夫君志』第五十三号・一九九六)

(10) 田中大士「長歌訓から見た万葉集の系統——平仮名訓本と片仮名訓本」(『和歌文学研究』第八十九号・二〇〇四)、同「万葉集片仮名訓本(非仙覚系)と仙覚校訂本」(『上代文学』第一〇五号・二〇一〇)など。

(11) ただし「別系統」とはいつても、『伊勢物語』や『枕草子』などと比較すれば『萬葉集』に異本と呼びうる伝本は存在しないといつてよい。この点は夙に小島憲之「萬葉集原典批評一私考」(『國語・國文』第三十卷第三号・一九四三)が指摘するとおりである。

(12) 田中「万葉集京大本代赅書き入れの性格——仙覚寛元本の原形態」(『國語國文』第八十一卷第八号)

(13) 京大本巻一奥書の引く禁裏御本奥書に「……漢字右付假名了。他本和有難哥之時以墨又字左點云々……字左以朱愚點了……」とある。

(14) 上田英夫『萬葉集訓點の史的研究』(塙書房・一九五六)。佐佐木信綱編『萬葉集事典』(平凡社・一九五六)、神掘忍「万葉集(神宮文庫本)」(『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店・一九九九)も同趣の見解をしめす。

(15) 田中「万葉集仙覚寛元本の底本——京大本代赅書き入れと仙覚本奥書からの考察」(『上代文学』第一一三号・二〇一四)

(16) 前掲(4)、(5)

(17) それにしても、寛元本系統の伝本である神宮文庫本・細井本には、寛元本の痕跡が①⑩の十首中二首にしかなく、しかもうち一首は附訓位置を誤っている。前掲(14)上田が前者を「純粹ならざる一伝本」と評したことが改めて首肯されるときにも、寛元本を復元するためには京大本代赅書入の綿密な検証が不可欠と気づかされる。

(18) 馬淵和夫「平安かなづかい」について」(『佐伯梅女博士古稀記念国語学論集』表現社・一九六九)

(19) 前掲(18)

(20) 傍書の位置から記述のように判断したが、あるいは当該傍書は「人てまきして」を意図したものかもしれない。「人ガてまきして」のガが無形化した句と考えれば文としての把握は可能である(渡辺実『国語構文論』塙書房・一九七二)。そうであれば字余りの問題は解消される。以上のように読み取る場合、「人てまきして」は『一葉抄』の独自本文ということになる。しかし原文「手枕而」との対応からすると、「し」を意識的に補う可能性は低いのではないだろうか。

(21) 前掲(6)

(22) なお、類聚古集が京大本とおなじ訓を持つ。この点は誤写説を考える場合の難点であるが、文永本の一本である京大本が、代赅書入ではなく主訓において類聚古集の訓を引き継ぐ可能性はきわめて低く、偶然の一致と見做してよいようにおもう。

(23) 前掲(14)

(24) 前掲(14)神掘「万葉集(神宮文庫本)」

(25) この点に関しては、新沢典子「本文批評における仮名万葉の価値」、樋口百合子「中世名所歌集所収の万葉歌の価値」（いずれも『萬葉写本学入門 上代文学研究法セミナー』笠間書院・二〇一六）、同「中世名所歌集にみる『萬葉集』長歌の享受と特質——細川本『歌枕名寄』を中心として」、『上代文学』第一一七号・二〇一六）などに指摘がある。また実践した論考として、佐竹昭広「萬葉集本文批判の一方法」、『萬葉集抜書』岩波書店・二〇〇〇、初出一九五二）、同「本文批評の方法と課題」、『萬葉集大成』第十一卷・平凡社・一九五五）が存する。佐竹論は近年批判にさらされており、個々の例に関しては批判の方が適切と判断すべき場合も少なくないが、手法自体の意義はいささかも減じていない。詳しくは拙稿「萬葉集の本文校訂と古今和歌集六帖の本文異同——佐竹昭広説の追認と再考」、『萬葉集訓読の資料と方法』笠間書院・二〇一六、初出同年）で検討した。